学校だより９月号　　令和４年８月２９日

下和泉小だより

横浜市立下和泉小学校

校長　舩木　淳

６月の終わり、ウサギの『ゆきち』が骨折しました。足から出血していることに飼育委員の児童が気づき、職員室へ知らせに来てくれました。職員が確認に行くと、左足から出血し、明らかに骨が折れていることがわかるほど足がぶらぶらしていたそうです。冬は氷点下、真夏は４０℃という劣悪な環境に置くことに疑問を感じ、室内での飼育を模索していたところでしたので、もっと早く対応していれば防ぐことのできた怪我だったと大いに反省しています。

急いでかかりつけの動物病院に連絡を取り、診察したところ、複雑骨折していることがわかりました。その病院で丁寧に処置をしていただきましたが、そこではそれ以上のことができないため、緑区にある動物病院で全身麻酔による手術をすることになりました。７月１７日のことです。

術後、お礼を兼ねて面会に行くと、足をピンクのギプスで固定されたゆきちが人懐っこい、いつもの表情で迎えてくれました。元気そうなので一安心。院長さんからは、けがの状況や手術の概要、今後想定されるリスクなどについて、丁寧な説明がありました。今回のけがは骨折が複数個所に広がり、治療が困難であったこと（わざわざ東京の動物病院に連れて行き、４人の獣医師で執刀したそうです）。患部に細菌による感染が見られ、手術後も安心はできないこと（今後の経過によっては再手術の可能性があるそうです）。完治までは数か月かかること。

どんなに痛くても「痛い」と言うわけでもないし、「安静に」と言ってもおとなしくしていてくれるわけでもないので、獣医という仕事の難しさと尊さに思いを巡らしました。何よりも、学校飼育動物も大切な一つの命だととらえ、採算を度外視して今できるベストな方法を考え、実践していただいたことには感謝してもしきれません。患者に応じた適切な医療を提供する。利益に関係なく、情熱を注ぐ。まさにプロフェッショナルな仕事です。

忙しい診察の合間を縫っての面会でしたので詳しいお話を伺うことはできませんでしたが、想像するに、自分の前に救いたい命があった、それだけのことなのだと思います。そしてそれを実現するだけの知識と技能を身に付けるだけの努力を怠らなかった。超一流とは、そういう人たちのことなのでしょう。

教育界では、令和の日本型教育の構築が求められていますが、その根っこにあるものは「誰一人取り残すことのない学び」の実現です。ゆきちの命を救ってくださったバーズ動物病院のみなさんのように、目の前の命に真剣に向き合うことがスタートです。私たち職員も日々感性を磨き、一人一人に適切な支援ができるよう高め合っていきたいと思います。

９月（８日、１２日、１５日）には、低・中・高のブロックごとに、教員同士がお互いの授業を見合う時間を設けます。何か特別なテーマを決めて行うような研究のための研究ではなく、集団や個に応じた学習を実現するために、私たちが学び合う時間。少しでもわかりやすい授業をしたいという、教師として当たり前の思いからです。その間、学年によっては給食終了後に下校することになります。ご理解いただきますよう、お願いいたします。